

東北大学附属図書館報

木這子

BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

—木這子（きぼこ）とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子（こけしぼうこ）—

目次

○特集・目録データベース	
目録システムの現状と課題……………	1
遡及入力的重要性と問題点……………	5
○目録作成を経験して……………	14
○第46回日本医学図書館協会総会……………	16
○平成5年度目録システム講習会	
（地域講習会）……………	17
○平成5年度 NACSIS-IR 講習会	
（地域講習会）……………	17
○平成5年度大学図書館職員長期研修に	
参加して……………	18
○第48回東北地区大学図書館協議会総会……………	20
○附属図書館の概況……………	21
○会 議……………	23
○お知らせ……………	23
○編集後記……………	24

特集・目録データベース

目録システムの現状と課題

情報管理課逐次刊行物掛長 佐 藤 義 則

1. 図書館目録データベースの現状

東北大学では1987年2月にコンピュータを導入し、総合的なコンピュータシステム化を推進してきた。T-LINES(Tohoku University Library Information Network System)と名付けられたこのシステムでは、図書館目録のデータベース化を中心に、図書・雑誌の受入、貸出処理、相互利用などの各業務処理を行っている。

この中で、目録データベースはとりわけ重

要な役割を担っている。いうまでもなく、図書館業務における目録は利用者と資料をつなぐために不可欠な手段であり、かねてより図書館業務の重要な柱として位置づけられてきた。この目録をコンピュータ処理によってデータベース化することにはいくつかの利点がある。第一は、従来のカード目録に比較して、多様な検索手段を確保することが容易となっていることである。カード目録における著者・書名・分類などの各々の体系による目

録形成は、蔵書が大きくなればなるほど作業が困難となるばかりだけでなく、時間を要するものであった。これに対して、データベース化によってレコードに対するインデックスを作成していく方式では、アクセスポイントを容易に増やすことが可能であり、カード目録と比較すればメンテナンス性も格段に高い。しかし、データベース化による最大のメリットの一つは、図書館間ネットワークによる書誌データの共有（共同利用）にある。現在の目録システムでは、学術情報センターにおける目録所在情報データベースを全国の大学図書館等（平成6年2月現在、300館が参加）が共同で構築している。その方法は、ある大学図書館において目録作業を行う場合に、既に他の参加館が作成した適正な書誌レコード（著作、出版に関する情報）が存在する場合には、所蔵レコードのみを作成すれば足りるというものである。書誌レコード、所蔵レコードはシステム機能によってその都度ダウンロードされる。これによって、全国に10の所蔵館がある場合に、9館は書誌レコードの確認を行えばよいことになる。加えて、JP-MARC、LC-MARCといった各国を代表する図書館等が作成した書誌レコードが参照ファイルとして用意されているため、もし目録所在情報データベース中にレコードが存在しない場合であっても、書誌レコードから作成を要するというケースは本学の場合では約3割程度に減じている。

しかし、最も強調されなければならないことは、このデータベースが利用者サービスの面でより多くのメリットをもたらしているという点にある。上述したようなアクセスポイントの増加に加え、特にTAINSを利用することによって、分館、部局図書室だけでなく研究室からもアクセスすることが可能となっ

たことが重要な要素である。実際は、運営費等の問題から時間を制約せざるを得ないが、論理的には時間・空間を問わずに目録データベースを利用できることとなったわけである。また、本学の目録データベース及び学術情報センターの目録所在情報データベースを合わせて利用することによって、求める資料が手元にない場合でも、文献複写、現物貸借といった手段によって取り寄せるための基盤が確立され、さらにこれら図書館間相互利用を円滑な利用を促進するためのILL (Inter-Library Loan) システムも平成4年度より開始された。

なお、現在、本学における目録データベースの状況は図1のようになっている。

図 1

区 分	レコード type	件 数
図 書	集合書誌	25,727
	単行書誌	261,942
	所 蔵	380,000 *
雑 誌	書 誌	43,132
	所 蔵	55,394
	製 本	592,509

* 図書所蔵レコード数は概算による。

2. 目録システムの課題

このように、目録情報のデータベース化は、利用者サービスを向上させるための基本的手段であるとともに、業務の効率化、迅速化をもたらしてきたわけである。しかしながら、昨今の情報環境の急激な変化は、図書館サービスのあり方に対しても大きな課題を与えている。図書館サービスにとって目録データベースは図書館サービスの柱である。目録システムにおける問題の幾つかを整理することによって、当面しての課題とは何かについ

て考えるための材料を提示してみたい。

1) 遡及入力

図1に見られるように、雑誌については新着情報を含めてほぼ全件の入力済んでいるものの、図書については未だ全体の20%強が入力されたに過ぎない。次節に紹介されるように学内の臨時予算によって遡及変換の作業を続けており、そこでは自動検索・自動所蔵登録のプログラムを導入しできる限りの努力を行っているものの、全蔵書のなかで占める割合は徐々にしか増えないというジレンマがある。全国における遡及変換作業が学術情報センターの予算によって一部の大学図書館の蔵書について実施されたものの、未だ量的には十分なものとなっていないため、遡及変換という面では書誌共有のメリットが活かされないのが現状である。また、本学のように全国のなかでも大規模でかつユニークな蔵書を抱える図書館においては書誌作成を要する資料の割合が多くなる。

データベースの成立条件として、ある限られた範囲であっても網羅的に収録されていることがあげられる。現状では、目録データベースだけでは求める資料を探すことはできない。全蔵書の遡及入力には億単位の大きな費用がかかる。目録作成は過去のことという雰囲気さえある。しかし、今後の図書館サービスの展開を充実させるためには、利用者と資料を結びつける目録データベースの形成は基本的なものとして位置づけられる必要がある。アメリカの大学図書館界においては、遡及変換は当然のこととして受けとめられている。例えばカリフォルニア大学バークレー校では連邦政府のグラントを受けて遡及変換を実施し、900万冊ほどの全蔵書の入力を終えようとしている。そして、この入力が新たな利用を引き出していくことになると考えられる。

2) ネットワーク上での公開

本学においては、研究室から目録データベースを検索することはいまや当然のこととなった。Medline サーバーも導入され、全学から合わせて月平均3000件以上もの利用が行われている。

しかし、ネットワークの進歩と普及は、図書館の世界にも大きな影響をもたらしつつある。とりわけ急速に普及しつつあるインターネットによって、情報へのアクセス可能性が飛躍的に増大している。例えば、本学内から諸外国の大学図書館の目録データベースやその他のインフォメーションサーバーに接続して利用することが可能となっているし、実際に利用されている研究者の方もおられると思われる。いまや膨大な量の情報がインターネット上で取り交わされている。

図書館のサービス自体も、ネットワーク上の規模的、質的な拡がりのなかで、情報流通サービスという総体的な観点から捉え直さなければならない時期に来ていると考えられる。

一方、このような中で懸念されることの一つは、情報流通の偏りが顕在化しつつあることである。日本語文字という特殊性もあるが、諸外国から一方的にデータを引き出すだけで日本において公開されているものが非常に限られているのが現状である。今後は、本学図書館においても目録データベースを整備し対外的に公開していくことを前提としていくことが必要である。また、当然のことであるが、資料の所在がわかるだけでなく実際の入手までフォローされなければ意味がない。国際的な情報源への相互アクセスだけでなく情報そのものの入手可能性を高めることを視野に入れたシステムの、制度的な整備が迫られていると考えられる。

3) 他のデータベース及びサービスとのリンク

これまでの目録データベースにおいては、単に資料の書誌データとその所在を提供しているにすぎない。実際に利用を行うためには、資料を探し出すための過程と資料を入手するための過程を、それぞれ別個に行う必要がある。

資料を探し出すためには、論文単位のタイトル、著者、抄録などを納めた二次資料データベースが分野毎に多数作成されている。日本の大学においては、かつてこれらのデータベースを利用するためには、JICST、DIALOG、などの外部提供機関にオンラインで接続して利用する以外に方途がなかったが、近年ではCD-ROMの普及によって安価に利用できるようになった。また、インターネットを介して外部提供機関にアクセスすることもできるようになった。

しかし、本学図書館で公開しているCD-ROM等のタイトル数は極めて限られているのが現状である。また、実際の利用にあたっては別個の過程を経なければならない。実はこの点が、アメリカ等の諸外国の大学図書館に比較して最も遅れている点の一つと言わざるを得ない。アメリカの大学図書館では、多くの場合、目録データベースとともに一般的でかつ頻繁に使用される雑誌記事索引、目次速報等のデータベースが同じインターフェイス上で公開され、所蔵情報とのリンクによってより実地的な利用形態をもたらしている。

一方では、全文情報データベースや電子ジャーナルと呼ばれる資料そのものの電子化も進んでいる。とりあえずは、図書館の情報と利用者の仲介役としての役割がさらに重要になっていくと考えられる。情報自体の高騰化が進むなかで一図書館、一大学だけでは決して十分なデータベース導入はできないことも予想され、大学間での協力を含め、コスト面

でも使用上でも容易に利用できるような環境を準備することが急務になっている。

また、2次資料のデータベースの利用度が増大するなかで、これらの情報入手が極端に外国に依存していることが指摘されてきた。学術情報センターにおいて、各大学との協力のもとで、目次速報データベースを共同構築する計画が進んでいるが、これが実現することによって情報提供機能が向上する契機となることが期待される。

4) 主題による検索

日本の図書館では、カード目録の時代から伝統的に件名 (Subject) 付与を行ってこなかった。国立国会図書館で作成しているJP-MARCにおいては、件名標目が与えられているが、件名標目表自体が大学図書館で利用できるような概念体系にはなっていないこともあって、目録データベースにおいても件名付与は行われていない。

このため、ある分野における資料を調べたいときに、適切な手段が存在していない。今後における大きな課題となっている。

3. おわりに

この10年の間に、目録のデータベース化によって業務の内容は随分と様変わりしたものの、目録の形成・維持が情報源の提供と資料の入手をつなぐ手段として基本的な手段であることは当分の間は変わらないであろうと思われる。

しかし、情報環境が変化するなかで図書館の役割もまた見直しを迫られている。情報のフローとストックというしばしば相反する要求を最適に行っていくことが図書館の使命であるとすれば、その二面で新たな方法の模索が始められなければならない。

(さとう・よしのり)

遡及入力的重要性と問題点

—— 一年半の入力作業経過を通して ——

情報管理課洋書目録情報掛長 前 田 裕 子

I・東北大学における遡及入力の経緯

1985年4月に学術情報システムが運用を開始し、その接続館及び書誌データは急速な勢いで増加している。しかしそのほとんどは新着図書の入力が中心であり、その図書館が持つ蔵書のすべてがデータベース化されている例はまだ少数だろうと思われる。東北大学附属図書館は1987年1月に学術情報センターと接続をしたが、全蔵書冊数約312万冊のうち約36万冊が図書目録データベースに蓄積されているにすぎず、残りは端末で検索出来ない状態にある。

図書館がその所蔵する蔵書の情報を迅速にかつ適性に提供することは、目録の基本的な機能であり、その蔵書を過去に遡ってデータベース化して目録情報を一元化していくことは、利用者へのサービスのみならず図書館の電算化を十分に活かすためにも欠くことの出来ない事業である。

東北大学附属図書館では平成元年～3年まで、第一期計画として学内特別経費で3名のアルバイトによる本館学生用閲覧図書の日録遡及入力を行い、約8万冊の入力を完了した。これに引き続き平成4年～6年まで第二期遡及入力計画として、本館書庫内の利用度の高い1972年～1986年受入分、和・洋図書合わせて約16万冊の日録データの遡及入力を始め、一年半を経過している。

この小稿は、附属図書館における遡及入力

を通してその重要性と問題点を、実際の作業面からとらえ、遡及入力計画をされている図書館にいくらかでも参考になればと思い、まとめたものである。

II・入力の基本方針と体制

“第二期遡及入力作業計画書”を作成するにあたって、学生用閲覧図書遡及入力の作業責任者であった逐次刊行物佐藤義則掛長の指導とアドバイスを受け、資料の管轄掛である閲覧第一掛と第二期遡及入力の目録作業責任掛である和漢書目録掛、洋書目録掛とで十分に検討し以下の基本方針と体制の確認を行った。

(1) 遡及の入力範囲

本館書庫本1972年～1986年受入分約16万冊 (新分類図書)

(2) 目録レベル

学術情報センターの基準

(3) 情報源

すべて現物からの入力

＊カードは情報量が少ないこと、目録規則の変遷などの理由。

(4) 登録の方法

学術情報センターに登録し学内にダウンロードする

(5) 作業責任者

和漢書目録情報掛長及び洋書目録情報掛長

(6) 予算措置

学内特別経費

(7) 入力要員

アルバイト 3名

(8) 登録処理方法

オンライン登録と NACPC-AUTO(学術情報センター目録自動所在登録システム)による登録。

(9) その他

端末 3台

NACPCによる自動登録のためのパソコンの準備

Ⅲ・作業計画書

“新分類図書の図書目録データベース遡及入力作業計画”(1992・6・17)

1. 入力内容

1972年-1986年受入本館書庫本,

新分類16万冊を平成4年7月から3カ年計画で行なう。

●入力対象資料

和図書は中国書, 韓国書を除き, 洋図書はすべて対象とする。

●一年次入力予定冊数 53,000冊

●アルバイト 3名(6時間勤務)

●1人当たり処理見込冊数(1日)約50冊

※NCにヒット, 参照にヒットした書誌, 複本登録のもので書誌的にほとんど問題がなく修正もあまり必要としないものと仮定しての算定。

●予算

要求額	平成4年度	5,512,000円
	平成5年度	5,512,000円
	平成6年度	5,620,000円
【配分額	平成4年度	3,655,000円
	平成5年度	4,961,000円】

2. 作業の手順

和図書(2名), 洋図書(1名)並行して分類Aから現物による入力を行なう。

(1) 本館書庫内の分類Aから資料を運ぶ。

●棚ごと資料を運び遡及入力帯出中の掲示をする。

●運んできた資料の最後の棚に請求記号を明示しておく(処理済み資料を元の書架に戻す際楽である)。

※掲示内容【遡及入力のため帯出中です。お問い合わせはメインカウンターまでお願いします。 A A

1 - 1

1 20 1992. 7. 1】

(2) 登録の対象資料(入力作業者が登録する資料)

●NCにヒットしたもの

●参照にヒットしたもの

●学内複本処理のもの

(3) 登録の対象から除く資料

●ヒットしなかったもの

●書誌的に問題や修正の多いもの

※これらの資料については, 和図書は和目掛長, 洋図書は洋目掛長を中心に処理する

(4) 図雑区分で問題となった資料

これらの資料については, 逐次刊行物掛と協議し処理する。

(5) 遡及入力処理の済んだ資料にはIDの貼付されている右下に【済】の印を押してもとの棚に配架する(電算化前に書庫内の資料には遡及用ID貼付済み)。

(6) 作業中に返却された資料の取り扱い

今回の遡及入力計画では, 作業中に返却された資料については入力の対象から除き, 次期計画の対象とする。

＊閲覧第一掛では、ID 貼付されていない図書の返却時に遡及用 ID ラベルを現物に貼付し簡略書誌に請求記号を入力している。

次期計画の際は簡略書誌をリストアップし、その中から目録データベースに登録されていない資料を抽出することができる。そのリストをもとにして請求記号と資料番号から遡及入力されていない資料の確認ができる。

(7) 作業の進捗状況の報告

●遡及入力者には、3 カ月に一度目録処理の済んだ分類と冊数の報告書を提出させる。

●閲覧第一掛には作業責任者から上述の報告を行なう。

3. 書誌管理について

(1) 目録レベルは、基本的には学術情報センターの基準に合わせる。

(2) 検索上よほどの支障がないかぎり遡及入力に関しては、NC のデータはそのままダウンロードし学内目録処理でケアする。

(3) NC にヒットしたレコードで、著者名のリンクがなされていないものは、遡及入力についてはあえてリンクづけはしない。

(参照等から流用して東北大学が最初に書誌作成を行う場合は、著者名のリンクは出来るだけ行う)。

(4) 学内目録処理では、ブルーフリストは出力せず検索画面で間違いを見つけたら、データベースを修正する－閲覧第一掛長と協議。

(5) データ入力中に生じた書誌的問題や不明な点、または閲覧サイドで見つけた検索語等の間違いについては、和目掛長、洋目掛長に問い合せる。

4. 遡及入力の処理方法

効率的に作業を進めるために事前に和・洋

各々の図書について NACPC による遡及入力テスト実施を行なった。

【結 果】

●和図書

＊対象	270冊 (A分類)
＊実施結果	NC にヒット 約80%
(内 登録処理	約50%
複本処理	約30%)
ヒットせず	約20%
(内 参照	約5%
オリジナル	約15%)

＊補足 ISBN がほとんど記述されていないため、自動登録処理は難しい。

●洋図書

＊対象	100冊 (A分類)
＊実施結果	NC にヒット 約50%
参照にヒット	約25%
ヒットせず	約25%
＊補足	ISBN の記述は約80%

このテストの結果、入力処理方法を和図書、洋図書各々以下の作業で進めることにした。

●和図書

ISBN がほとんど記述されていないので自動登録処理は行なわず、通常のオンライン作業で処理する。

●洋図書

＊ISBN の記述が約80%あり、自動登録のヒット率が高い。

＊新人の指導、養成に3－4 カ月を要するのでその間のロスが大きい。

＊自動登録処理で出力されるブルーフリストは遡及入力した資料のデータ分析に有効である－NC のヒット件数、参照のヒット件数中どのフィールドでの修正が多いか等の分析が出来、今後の遡及入力の計画に利用できる－

以上の点から判断して洋図書については NACPC による自動登録処理で入力し、入力作業者は学内目録処理のみで、当分は作業の状況、入力冊数の経過を観る。

5. 遡及入力作業のため必要なもの

- 登録用端末 3 台
- 自動登録のためのパソコンの設置
- ブックトラック 3 - 4 台

6. その他

●カード目録（遡及用 ID が貼付してある分類目録）への手当ては以下の理由で行わない。
 ＊返却された資料で現物にのみ遡及用 ID が貼付され、カードに貼付されていないものがあるのでカードとのつきあわせは無意味である。

＊現物をみれば、入力の済んだ資料には【済】の印が押してあるので入力したかどうかの判別は可能であるし、更にオンライン検索で情報を把握することが出来る。

●作業中に返却された資料の取り扱い

＊作業処理の範囲が広がってくると、返却本数が当然多くなり、遡及入力自体や目録の日常業務に支障をきたすことが考えられるので、入力の対象から外す。

N・ 第一年次結果報告（1993・8・6）

（1）第一年次実施結果

期間：平成4・7・1 - 平成5・3・31

処理方法：和図書：現物から端末による入力
 洋図書：現物に ISBN の記述があるものは自動登録処理、それ以外は現物から端末による入力。

入力対象分野：政治、行政、法律、経済

	入力冊数	所要人員
当初計画	53,000冊	延967日人
実施結果	43,130	540

【実施結果43,130冊の内訳】

	オンライン登録	複本登録	自動登録	計
和図書	21,739冊	9,162	0	30,541
洋図書	8,958	377	3,254	12,589

【入力対象図書の検索結果】

	検索対象冊数	NC	参照	ヒットせず
和図書	31,540	25,232	315	5,993
洋図書	13,180	7,908	2,504	2,768

【まとめ】

●和図書

＊現物による検索で80%が NC にヒットしその内30%を複本（すでに所蔵が NC についているもの）が占めている。和図書は複本がかなり多いことを示している。

＊ヒットしなかったものは、年代的に明治後期、大正期、昭和初期のもので大部分が古い資料である。

＊書誌的にはあまり修正はないが関連情報のヨミののないが目立つ。

＊ISBN はほとんど記述されていない。

●洋図書

＊NC のヒット率は和図書に比べ20%ほど低い、参照に約20%ヒットするので入力作業が比較的楽である。

＊そのまま参照から流用したと思われるデータが多い - 目録規則の変遷。

＊オリジナル入力と思われるものは、TR のミススペルが多かったり、責任表示や ISBN 等が記述されていないデータが目立つ。これらはカード入力の原因と考えられる。

＊ISBN は約80%記述されている。

【補足】

一年次計画で入力した資料は和・洋図書とも年代的に古く、また法令集、判例集、議会資料が多く資料そのものに特殊性があることでヒット率が多少低いのではないかと考えられる。また NC にヒットしても同一のものかどうか同定出来ないデータが和・洋図書とも多い。これは、カードによる変換入力が必要な原因と考えられる。

V. NACPC-AUTO (学術情報センター目録システム自動所在登録システム)

【方法】

パーソナルコンピュータに専用 UIP ソフトを付加し、ISBN により検索を行い、NC 総合目録データベースにその ISBN を持つ書誌が 1 件ヒットした時、登録処理を自動的に行なう処理である。同時に単行書誌、集合書誌、所蔵の仮想画面情報を PC-IFP にダウンロードする。

【手順】

- (1) パソコンに ISBN と資料番号を入力。
- (2) ISBN を KEY にして NC 検索、登録。

【メリット】

- (1) 整理業務の迅速化—図書館が所蔵している蔵書の情報を迅速かつ適正に提供するという目録の機能及び目録作業の効率化。

＊一度に大量に登録が出来る (平均して約 150 冊)。

＊自動登録処理をかけている間は他の業務が出来る。

- (2) 複本登録のものが容易に区別出来る。
- (3) 入力機会の減少。

＊目録担当者の端末による入力作業の軽減。

【NC 登録の所要処理時間】

	1 冊	50 冊
端末による登録	約 5 分	約 250 分
自動登録	約 1 分	約 30 分

＊端末による登録処理の 5 分は目録経験一年以上の担当者で、書誌検索から登録、書誌 (集合書誌も) のとりこみまでに要する最低時間。

【ブルースリストの出力】

自動登録する対象はあくまで NC 総合目録データベースに 1 件ヒットした時にのみ限定される。したがって自動登録出来なかったものは以下のように処理内容がブルースリストに出力される。

- a. ヒットしません。
- b. 参照マークにヒットしました。
- c. 重複貯蔵データです (複本)。
- d. NC 書誌に複数件ヒットしました。

“c”を除いたものについては担当者が端末でオンライン登録を行なう。

【品質管理と問題点】

自動登録処理は担当者による端末の作業とは違い、書誌の確認、著者のリンクの有無、集合書誌の重複など画面上でのチェックや修正は出来ないもので現物とグループリストのチェックを行い修正作業をすることになる。

しかし、遡及入力に関しては現物とグループリストとのチェックは物理的に無理があるので以下の措置をして書誌の品質管理を行っている。

＊著者名のリンクづけはなされていなければそのままにする。

＊学内目録作成時に現物と画面で書誌全体のチェックを行い、学内処理で修正し、同時に検索の重要な部分は NC も修正する。

＊setISBNをもつもの、複数のISBNをもつもの、volの繰り返しが多いものの中には自動登録に不向きなものもあるので区別する必要がある。

＊雑誌か図書かを区別する書誌的判断。

(学内目録との整合性)

以上の点から考慮して、自動登録処理は書誌的な知識と把握が要求されるので、目録業務に熟知した職員の入力が見込まれる。

(1) 【自動登録対象図書の検索結果】

入力対象冊数	6,418冊	率
自動登録	3,254	50.7%
複本登録	212	3.3%
NC 複数件	128	2%
参照 (LC)	1,669	26%
ヒットせず	1,155	18%

(2) (1) の自動登録対象図書の検索結果の内、参照にヒットした1,669冊をブルーリストによりISBN以外の検索KEYで再検索。

	冊 数	率
NC にヒット	684冊	41%
LC にヒット	985	59%

(3) 同じく、ヒットせずの1,155冊をISBN以外の検索KEYで再検索。

	冊 数	率
NC にヒット	116冊	10%
LC にヒット	1,039	90%

ブルーリストから以上の結果が得られた。

【まとめ】

＊一年次計画で入力した対象分野については入力対象冊数の約50%がNCにヒットという

結果になっている。

＊(2)の表の検索結果でも明らかなように参照にヒットした内の約41%はNCに確実にヒットする。これはNCにデータがあってもISBNが記述されていないため、自動登録処理のKEYであるISBNではNCにヒットしないでISBNの記述がある参照にヒットしたためである。

＊ヒットせずの内の約10%もヒット率は低いが、NCにヒットする。これらはいずれもカードによる変換入力の原因と考えられる。以上の結果から、ISBNをKEYにして自動登録処理を行なった場合、NCのデータにISBNが記述されているとNCのヒット率はかなり高くなることは確実である。

遡及入力は大量の資料を入力しなければならないので、書誌の品質管理をしながらいかに効率よく目録作業を行なうかが要求される。こうした観点から、特に遡及入力にNACPCを使用し自動登録処理を取り入れた場合のメリットは、前述したように大いに評価される。(【メリット】の項参照)

この自動登録のKEYとして一番適切で確実性がありヒット率の高い検索KEYは、今のところISBNと考えられる。1971-1972以降の出版物には、特に洋図書の場合ほとんど記述されているので、この年代の資料をNCに登録する際ISBNは容易に入手可能な情報があれば、常にデータ記入を行うことが望ましい。これからカード変換のみならず現物による遡及入力を行う図書館が益々増え、体制と設備が十分整えば迅速に効率よくしかも大量に作業を行うために、自動登録処理を取り入れる図書館も増えてくると考えられる。こうした時ISBN入力を必須条件

とすれば、自動登録の作業効率を高めることは可能である。

V・ 遡及入力中間報告書

(1993・11・30)

1.【入力実数】

	平成 4	平成 5・4-11	計
和図書	30,541冊	29,354	59,895
洋図書	12,589	16,914	29,503
計	43,130	46,268	89,398

2.【報告】

●遡及入力対象図書約16万冊の内訳

和図書（入力対象） 約65,000冊

中国書、韓国書（入力対象外）

約20,000冊

洋図書（すべて入力対象）

約75,000冊

●和図書

入力対象となる和図書約65,000冊の内、約60,000冊の入力が済み、オリジナルのもの、問題の多いもの等約2,000冊、大型本約400冊を残し12月いっぱいに入力を完了する予定である。和図書が順調に進んだ理由として

＊入力作業員2名が経験者（学生用閲覧図書で経験済み）である。

＊NCのヒット率が非常に高く、しかもその約30%が学内複本処理のものである。

＊多巻ものが多く、処理が容易である。

＊和図書蔵書の一部である中国書、韓国書が入力対象外であることなどが考えられる。

●洋図書

入力対象75,000冊の洋図書の入力実数は約30,000冊である。

＊初年度は入力作業員が一名でしかも未経験

者であったため、教育と指導に数カ月を要し、2年目から一名増員になったが、8月からなので指導に要することがまだ多い。

＊NCのヒット率が和図書に比べてかなり低い。

＊英語以外の言語、ドイツ語、フランス語の資料が多く、これらはほとんどオリジナル入力のものが多いため洋書目録掛で日常業務と並行しながら入力している。特にロシア語の資料は掛で語学の勉強会をしながら入力しているのが現状である。

＊学内複本処理、多巻ものが和図書に比べて少ない。

こうした点をカバーし効率よく作業を進めるために、洋図書については自動登録処理を導入して一年半で約30,000冊の実数をあげることが出来たが、上に述べたような理曲や洋図書自体の言語の難しさも加わって、和図書に比べ入力実数に差が生じている。

3.【今後の作業の進め方】

和図書の未入力資料の整理、点検が終わりしだい（予定平成6年2月頃）洋図書の入力を4人体制で行う予定である。この間、自動登録処理も効率のよい部分は継続して導入し端末による入力との二本立てで作業を進める。

VI・ まとめにかえて

図書館業務の基本である目録業務に携わる者として、日常業務と並行しながら遡及入力を初めて手懸け一年半が経過した。作業中は計画どうり進まなかったり、新刊図書とは違う問題にぶつかったり、又時には思いがけない結果にであったり等、この遡及入力を通して日常業務からは得られなかった多くのことを発見することが出来た。特に若い目録担当

者を指導していく上で、目録業務経験の未熟な私にとって今回の遡及入力は大変役になっている。一方相応の体制と設備が整っているとはいえ、日常業務を抱えながら長期的な遡及入力作業を管理していくことの“大変さ”も同時に強く感じている。この第二期遡及入力計画は作業終了までまだ一年半残っておりここではきちんとした成果と結論を述べることは出来ないが、これまでの入力作業を通して、特に気が付いたことをまとめてみた。

(1) 洋図書に NACPC による自動登録処理を導入したことは、大量の資料を効率よく迅速に処理するのに非常に有効である。

(2) 情報は”すべて現物からのみ入力”を採用したことは、図書の出し入れという手間はあっても、新刊図書と同様品質管理を保ち利用者にとって使い易い書誌レコードにしていく上で、非常に合理的に入力作業を進めることができた。カードの不備は情報量が少ないだけでなく、採用してきた目録規則に変遷があること、カードに記述されている版次や出版年が図書館によって扱いが違ふこと、またシリーズ名、ISBN などはカードに記述されていない場合が非常に多いこと、カード作成時のスペルミスが多いこと等、今回の作業中顕著に目立った点である。カードによる遡及入力の場合、こうしたカード目録の不備な点や不明な点は事前に調査、把握しておく必要がある。これらの手間を考慮し、入力済みであるか否かも現物で確認出来るという点も含めて、情報が多くしかも種々な点で確実性のある現物による入力が望ましいと考えられる。

(3) アルバイトによる入力の場合は、入力作業の範囲が限定される。図書業務未経験者

でも指導体制がきちんと出来ており、最低 4 カ月位基本的教育を行えば、NC にデータがあれば和図書は大部分、洋図書は英語の書誌構造の簡単なものはある程度処理出来る。しかし洋図書については多言語なので、当然英語以外のオリジナルは入力に限界がある。又雑誌か図書かの判断も危険である。

【さいごに】

遡及入力は準備作業や作業進行中にも種々な問題が生じ相当の労力を要する作業である。その中でも特に入力データの品質管理に十分配慮する必要がある、出来るだけ精度の高いデータ入力を行わないとサービス面で支障をきたすことになる。一方、膨大な量の資料を、遡及入力専門の作業者が入力しているとはいえ、入力作業への指導、教育、進捗状況の報告、作業の管理、図書館内外の書誌調整、洋図書の自動登録の準備等は、当然図書館職員がかかわっていかねばならず、書誌階層の複雑なもの、英語以外の言語の難易度の高い資料のオリジナル入力、ロシア語をはじめとする特殊文字の入力も図書館職員が日常業務と並行して行っているのが現状である。こうした作業を含めると、目録担当者の労働量を約 50% 前後は遡及のためさいていることになり、日常業務が大量に入ってくると当然掛員への業務負担も大きくなり、常に掛の管理運営に注意を払っていないと本来の目録業務にも支障をきたしかねない。このように遡及入力作業には相当の労力が必要であり、ややもすると付加的業務として位置づけられやすい。それ故遡及入力の意義と重要性、作業の状況を図書館全体にきちんと理解・協力してもらふことが必要であり、同時に予算措置に基づいた相応の体制作りと十分な設備を整

えることは言うまでもない。

図書館の遡及入力成果はレコード量が多く、その品質もある程度管理されていればいるほどその図書館でのサービスや業務で威力を発揮する。特にILLサービスは現在資料コピーの提供だけでなく、資料の現物貸借のサービスも開始されている。そうなれば当然総合目録データベースの拡充と充実が必要となり、遡及入力はこうした観点から大きな意義を持つ。しかしながら、大学図書館における遡及入力はまだまだ本格的に進んでいないのが実情である。東北大学附属図書館は、学術情報システムを利用して、第一期、第二期遡及入力計画を進めてきている。だが、中国書、韓国書をどうデータベース化していくか（現状ではローカル処理のみで約4,000冊入力）、また入力作業が一年半経過していく過程で、遡及入力された書誌レコードが本当に利用に耐えうるレベルなのかどうかという品質の問題、数多い複本やほとんど利用されることのない資料を含むすべての蔵書を入力する必要性があるのか、予想外に返却された大量の図書をどう取り扱うか、点検作業を効率よく行いかつ正確さを期するためにはどういう方法がよいか等の数多くの問題にぶつかっている。

第一期、第二期遡及入力対象資料とも大部分は1970年前後以降出版された図書なので、ISBNをKEYにした自動登録処理も高い作業効果をあげており、アルバイトによる入力もある程度の範囲までは可能である。しかしながら、入力対象資料の年代が古くなればなるほど、書誌や目録についての専門的知識、語学の専門性が要求され、アルバイトによる入力の範囲はおのずと限定されるようにな

り、遡及入力は図書館の専門の目録担当者による入力の事態を迎えることは必至であろう。以上述べたような点を考慮し、その図書館における資料の入力基準—資料の選定、優先順位、研究室貸出しの資料の取り扱い等—を設け、その図書館における目録データベースの構築の方針を含めたきちんとした遡及入力の総合的な将来計画をたてることの重要性を、一年半の作業を通して感じている。と同時に総合目録データベースを構築していくという共同目録作業の観点からも今後急速に増えていくであろう遡及入力データの品質管理は、新着図書と同様の“おもさ”で考えていく必要性を痛感している。

本稿を書くにあたり、数多くの資料を参考にさせて頂きましたが、紙面の都合で省略いたしました。

最後になりましたが、第二期遡及入力作業計画作成にあたり多くのご示唆・ご指導を賜った逐次刊行物佐藤義則掛長、システム管理日出掛長と大山貢さん（NACPC-AUTOのご協力）、及び入力作業に大変なご協力を下さった遡及および和・洋両目録掛の皆様には厚く御礼申し上げます。

（まえだ・ひろこ）

目録作成を経験して

情報管理課和漢書目録情報掛 多 賀 菜 奈 子

情報管理課洋書目録情報掛 鈴 木 陽 子

1. はじめに

平成5年4月1日付で、東北大学附属図書館に採用され、はやくも半年以上が過ぎた。二人とも、和漢書と洋書の違いはあるが、目録情報掛に配属され、とまどいながらも日々の業務に取り組んでいる。そのなかで、このたび、このような機会をいただいたので、日常の業務をまとめた上で、新人として、今後の抱負を述べたい。

2. 目録業務について

目録情報掛の日常業務においては、学術情報センターの目録システムへ登録し、そのデータを学内に取り込んで、学内の利用者のためのオンライン目録を作成している。

学術情報センターの目録システムには、書誌と所蔵のデータを登録する。まず、書誌登録を行なうが、その際にデータが重複しないよう、事前に十分な検索が必要となる。書誌データは、すでに登録されたものがあれば、それが正しいか否か確認して学内に取り込むだけでよいが、まだ登録されていないければ、『目録情報の基準』に基づいて作成しなければならない。書誌登録の完了後は所蔵登録へ移行する。そこで入力するデータは、配置コード、資料番号のみで、これも学内に取り込む。

翌日は学術情報センターから取り込んだデータの学内処理を行なう。第一に、書誌データを加工する。その主な点は検索語の追加である。一例をあげると、和書の場合、翻訳書の外国人の著者名は、学術情報センターではローマ字形で記述することになっており、そ

のままでは一般の利用者には検索しづらい。そこでカタカナで検索語を追加することによって、利用の便宜をはかっている。学内処理の第二は、所在情報の入力である。本館の図書のほか、文系四学部、旧教養部、研究所などの図書も扱っているため、それぞれの予算コードと所在コードを確認したり、国立国会図書館分類法（NDLC）に基づいて、分類記号を付与したりしている。

その他に、和洋合同で月二回の勉強会が行われている。本館の目録掛だけでも十数人になるため、個々人により目録の取り方がまちまちにならないよう、目録の基準を確認することが目的である。現在は学術情報センターが発行している『オンライン・システム・ニュースレター』の読み合わせを行ない、同時に作業時に出てきた問題についても話し合っている。経験の少ない私たち新人にとって、この勉強会は、他の目録担当者の経験した事例についても学ぶことができる貴重な場である。

業務の内容については以上であるが、次に、目録業務に携わっての若干の感想を、それぞれ述べることにする。

3. 和漢書目録掛を経験して(多賀)

私の場合、利用者から図書館員へと立場が変わって、利用者だった頃は知らずにいたことがいかに多かったかを痛感した。目録を作成するために検索の重要性を教わってはじめて、学生時代にはオンライン目録の正しい検索方法を知らなかったことに気が付いたので

ある。

例えば、『日本の歴史をよみなおす』という図書をさがしているときに、書名から検索するには「ニホンノレキシオヨミナオス」と入力しなければならないのだが、私は「ニホンノレキシヲヨミナオス」と入力していたため、当然のことながらヒットしない。ところが、利用者だった頃の私は、この本はまだ購入されていないのだろうと考えてあきらめていた。実際にはすでに登録されているにもかかわらず、検索語はヨミで入力するのだという基本的なことを知らなかったために、利用できなかったのである。この他にも、漢字検索ができること、前方一致のかけ方、分類からの検索など、目録業務を行なうようになってはじめて学んだことが多い。このように正しい検索方法を知らずに自己流で検索しているのは私だけではない。何人かの学生に尋ねてみたが、検索方法の正確な知識をもっていた者は一人もいなかったのである。

オンライン目録には利点も多いが、正しい検索方法を知らない、求める情報が存在するにもかかわらず、それを引出すことができなくなってしまう。本学のように学生数が非常に多いところでは困難なことも多いかと思うが、コンピュータ時代に対応した利用者教育の拡充が今後ますます必要になってくるのではないだろうか。

もちろん、私自身、目録業務を担当するものとして、正確なデータ入力を心掛けなければならないことはいうまでもない。データの作成段階でミスがあれば、利用者が正しく検索語を入力しても、検索できないからである。目録担当者は利用者に直接接することは少ないが、だからこそ、常に利用者サイドのことを意識しなければならないと思う。

以上は、半年間、目録業務を経験して感じ

たことである。まだ図書館員としての第一歩を踏みだしたばかりだが、これからも、利用者であったという利点を生かしつつ、利用者本位の図書館を目指していきたい。

4. 洋書目録掛を経験して(鈴木)

この掛に配属されて半年、ようやく端末操作や分類にも慣れてきて、目録担当者として、自分がどんなことを学んでいくべきかを考える余裕も出てきた。現在最も感じているのは、洋書の場合、様々な言語があるので、それら言語の特徴を把握しておく必要があるということである。英語に次いで多いのはドイツ語、フランス語、ロシア語などだが、サンスクリット語やアラビア語の図書までもが洋書として扱われているのをみて、その範囲の広さに驚いている。

どの言語についても、よくとまどってしまうのは、大文字の使用法や略語の使い方である。また各言語ごとの特徴があり、例えばドイツ語では名詞の格変化があるため、出版者などを省略するときには注意している。このように図書館員として求められる語学の知識は、読めて辞書が引ける程度のごく基本的なことである。しかし、ドイツ語やロシア語の勉強を始めてみてもなかなか頭に入らず、学生時代に語学をなおざりにしていたことについて、今更ながら後悔している。

その他に、検索技法や本学の蔵書構成なども目録を作成することで徐々に学んでいきたいと思っている。目録業務は、直接利用者と応対することがないため目立たないが、図書館員としての幅広い知識を身に着けることができるため、やりがいのある仕事だと感じている。

(た が・ななこ)

(すずき・ようこ)

第46回日本医学図書館協会総会

標記総会が去る5月20日～21日の両日において、当番館：川崎医療福祉大学（岡山県倉敷市）を会場として、協会加盟105館およびオブザーバー5機関から、館長・主任司書等240数名が参加して開催された。

総会では、来賓としてご列席された文部省学術国際局学術情報課長 長谷川裕恭氏、韓国医学図書館協議会理事 李承河氏から祝辞をいただき、続いて、協会奨励賞の授与が行われた。

総会の日程は、第1日目「司書会議」第2日目「総会」でその概略について紹介する。

第1日目「司書会議」

司書会議での協議議題は、①我が国の医学雑誌のMEDLINEへの収録数の増大について、②医学図書館員教育大綱(案)について、③教育研修図書館制度の導入についての重要な議題の審議と、各地区の活動状況等について報告があり活発な質疑応答があった。

また、東京医科歯科大学図書館副館長 菅利信氏の「変貌する医学図書館員の役割」と題した講演のあと、協会奨励賞を受賞された東京大学医学図書館 中山達也氏の「医学分野外国雑誌の差別価格調査－1990年から1992年にかけての経年変化－」と群馬大学附属図書館医学部分館 川島一、青木静江氏の「情報検索システム LASSIE の発展と成長」についての研究発表が行われた。

第2日目「総会」

総会においては、新任館長・新任主任司書、名誉顧問、会友、永年勤続表彰者の紹介があり、協会奨励賞の授与に引き続き議題の審議に入った。①平成4年度事業報告・決算報告

②平成5年度事業計画(案)・予算(案)について審議され原案どおり承認された。協議事項は第1日目の司書会議で協議された3議題について審議され承認された。なお、「医学雑誌のMEDLINEへの収録数の増大」については、本協会では収録予定誌の調査・検討を行うとともに、日本側の意見をまとめ、「米国国立医学図書館」に要望することが了承された。続いて、川崎医療福祉大学学長 江草安彦氏の「高齢化時代と医療福祉」についての特別講演が行われた。

総会の最後は「医学教育と医学図書館」のテーマで行われたシンポジウムで、次の5人のシンポジストから、①川崎医科大学副学長

山下貢司氏「卒前医学教育と図書館」、②関東通信病院図書館長 多賀須幸男氏「卒後教育と病院の医学図書館」、③日本医師会常任理事小池 麒一郎氏「医師の生涯教育と医学図書館」、④東京慈恵会医科大学医学情報センター助教授 裏田和夫氏「医学図書館員の立場から」、⑤帝京大学医学図書館長鈴木淳一氏「医学図書館はニーズに込えているか」について発表があり、これらに対しフロアの参加者とシンポジストの間で種々の質疑応答が活発に行われた。次期当番館は、北里大学に決定し、2日間にわたる会議は盛会のうちに終了した。

(医学分館)

平成5年度目録システム講習会(地域講習会)

平成5年度の目録システム講習会(地域講習会)は、7月5日(月)から9日(金)の5日間の日程で、図書館を会場に学内外から11名の受講者が参加して開催された。

本講習会は、学術情報センターと開催大学の共催で実施されるもので、「目録業務担当職員にシステムの運用に関する知識・技術を習得させる」ことを目的としており、今年度は本学をはじめ全国19大学で、24回の開催が予定されているものである。

本学では、この講習会を昭和62年度から毎年実施しており、これまでに学内の受講者が82名にのぼるほか、東北地区の国公立大学からも50名が受講している。

講習は、学術情報センターから派遣された酒井清彦、飯倉忍の両講師のほか、本学の6

名の講師により、学術情報センターの定めたカリキュラムに従って「目録システム概論」「目録情報の基準」「端末操作法」「目録検索」「目録登録総論」「雑誌登録」等の講義と目録端末を使つての実習が行われた。

実習では、講師陣に加えて情報管理課の和漢書、洋書両目録情報掛の全員にも実習補助者として全面的な協力を得て行われたが、時には予定された時間を越えるほど熱心な受講者への支援は、この講習会の成果に大きく貢献するものとして、多くの受講者から感謝の意を述べた感想が寄せられている。

最後に、講習会に直接担当いただいた講師及び実習補助者、また、様々なかたちで協力をいただいた館員各位に、紙面を借りて謝意を表したい。

平成5年度 NACSIS-IR 講習会(地域講習会)

平成5年度 NACSIS-IR 講習会(地域講習会)は、学術情報センターと東北大学附属図書館との共催により平成5年7月27日～28日の2日間にわたり東北大学大型計算機センターを会場として開催された。

本講習会は、学術情報センターで開催されている NACSIS-IR 講習会のほかに、各地区の大学図書館と共催で実施される地域講習会で、「代行検索担当者および情報サービス利用者に知識・技術を習得させる」ことを目的としており東北地区では初めての開催ながら国・公・私立大学から16名の受講者があった。

講義および演習は、学術情報センターの小陣左和子、林雅子の両講師と本学の講師補助者の協力のもとカリキュラムに沿って「情報

検索の手順」、「基本コマンドの使い方」、「応用検索」、「論理演算の組立て方」等の内容で実施された。講師の熱心な指導と受講者の真摯な受講態度とが相俟って2日間とも予定の時間をオーバーするほど熱のこもった講習で成功裏に終了したといえよう。

末筆ながら、学術情報センターより講師の派遣、テキスト・資料の配布等種々ご配慮いただき深く感謝すると共に、担当された両講師、講師補助者および様々な協力いただいた館員各位に心からお礼申し上げます。更に、快く会場を引受けていただいた大型計算機センター及び助言、お世話くださった同センター職員の方々に紙面を借りて衷心より感謝申し上げます。

平成5年度大学図書館職員長期研修に参加して

医学分館整理掛 芳 賀 博

(とき：平成5年7月19日～8月6日 ところ：図書館情報大学)

筑波の夏は暑い、と先輩方からアドバイスをいただき、汗かきの大の暑さ苦手な身、現地に着いたら宅急便で扇風機を送ってもらうつもりで、未知の筑波山麓へ向った。研修生としては幸運にも今年は冷夏、夜は毛布を重ねての就寝、昼間はの上なく快適な(?)気温、勉学環境であった。残るは研修態度のみ。

北は北大から、南は琉球大の方まで国公立大学、大学共同利用機関の館員、総勢42名(男29名、女13名)、図書館職員として働くこと10年以上、おおむね40歳以下のみならず、20代半ばから40代まで、多彩な顔ぶれで華々しく開幕した。以下報告と感想を述べさせていただきます。

三週間にわたる研修は、東京地区での一週間をはさんで、前後、図書館情報大学を主会場兼宿舍として筑波地区で行われた。講義)図書館学、図書館行政学、情報学、図書館関連講義、計37科目であった。図書館にかかわる全ての人が心掛けねばならぬ基本的なものから、応用かつ最新の知識まで、多岐にわたるものであった。図書館システムの高度化、電子化図書館への対応等、次世代のシステムとして時代に対応できるシステムとは何か、がメインテーマであった。

「日本の研究者と大学図書館」では、今日、世界で問題視されている環境破壊の面から、人類は危機にたたされておられ、防ぐ手立としても、日本が世界をリードしてゆかねばならない。又、世界からも期待されている。日本の研究者が、単に暗記による物知りにとどまることなく、自分で情報を調べられる人

間が必要である。図書館はその調べる人に提供する立場にある。その日本が生き残れるか、滅するか、日本の将来は我々研修生にもかかわっているという責任と危機を感じさせるものであった。

共同討議)四つに分かれてのグループ別討議と、グループ討議報告からなり、3日間にわたり行われた。討議テーマは①「大学図書館の公開と相互協力」②「ニューメディアの収集とその利用、遡及入力」③「今後の図書館業務システム」④「今後の大学図書館の管理・運営」であった。

①について詳しく述べると、「公開」については、紹介状の有無にかかわらず、来館すれば閲覧可能な館が多数であったが、公共図書館との相互貸借を実施している館・公開規程を公表している館もあった。

問題点は、「公開」の解釈が図書館、大学、自治体、市民、それぞれ異っていること。制限をなくするのが理想だが、大学図書館員の努力だけでは限界があること等が上げられた。

対応策としては、二つの段階をふまえて公開してゆくことが望ましい。第1段階では、閲覧、複写、貸出、レファレンスサービスの内容とし、「地域図書館で得られない学内資料を一般市民に提供すること」を原則として、地域の公共図書館との連携、協力をはかってゆくこと。サービスの限定条件を減らす努力をすること。学内資料提供の整備をはかること。時間外サービス内容向上のための人員増等の措置をはかること。等々。第2段階では、未来像とも云うべく図書館が提供している全てのサービスを全ての市民に公開すること。

「相互協力-ILLを中心に」については、問題点は、依頼、受付とも件数の増による業務負担の増大。受付を速く処理すると受付件数が増加する。大規模館への依頼が集中している。依頼処理は、入力の手間が増えた。等々。

解決策としては、外国雑誌センター館の体制を充実させ集中化を促進する。複写料金体制の見直しをはかり（料金の増額）、依頼館、受付館に還元して増員につなげる。徴収猶予の一本化をはかる。システム内の料金に関することは全て統一的に処理できるようにすること。等々であった。

実習) 図書館情報大学で行われた「マルチメディアワークステーション」による UNIX 入門」では、ワークステーションの利点は、従来の大型汎用計算機と違い多くの機種が UNIX という共通の OS の上で動いているので、違う機種でも容易に操作できることである。図書館でも、システムのダウンサイジング化、分散処理化、マルチメディア情報検索、ネットワークサービスなど、益々需要拡大されてゆくワークステーションに触れ、基本的な操作を体験できた。その他、「レファレンスサービスの実際（筑波大学図書館）」、「情報検索の実際（学術情報センター）」であった。

見学) 慶応義塾大学三田メディアセンターで行われた「メディアネット構想」では、学外向けには、NACSIS-CAT, COSMOS 等、NC に貢献しながら、自館の構想を次のとおりはかるというものであった。塾内データベース構築として、研究業績ファイル、紀要類の索引のデータベース。学位論文のデータ。研究発表支援として、論文投稿におけるフォーマット作成。学会発表のためのスライド等作成。教育支援サービスとして、教材作成支援。進学・留学情報の提供。就職情報の提

供。キャンパス情報の提供。コンピュータ、情報リテラシーの教育。等々。

国文学研究資料館で行なわれた「国文学とコンピュータ」では、国文学資料を電算処理化するまでの経緯等の説明があった。従来、国文学にとってコンピュータは最も縁遠い存在と見られていたが、現在幾つかのシステムの実用化を達成している。問題は山積みであり解決せねばならない点が多数あるにしても、情報処理の必要と、歴史的遺産の保存という地道な努力の大切さを同時に感じさせるものであった。その他、国立国会図書館、東京工業大学附属図書館、筑波大学附属図書館を見学した。

今回の研修に参加して、現在の大学図書館に関わる新しい知識を一通り拝聴し、新しい技術に接して不勉強の身には得るところが多かった。合宿制の研修なので、単なる現職者教育の域に止まらず、全国的な人的ネットワークが持てたこと。又、全国の大学図書館に働く一人としての責任を再確認した貴重な場でありました。又、一人でも多くの館員が希望に応じて参加できる研修であって欲しいものです。

最後に、研修中の生活の面でも快適に受講させたいという雰囲気一極の図書館情報大学の職員の方々のお心づかいと、今回の研修への参加に当り、この機会を与えてくださった図書館の関係者の方々、職場の館員の方々の支えがあつての3週間であつたことに対して、深く感謝申し上げる次第であります。

追記

恒例になっている研修後の同窓会が、今年も発足しましたが、我が同窓生による第1回目の集いが沖縄県で開催されることをみても、何とパワフルな同窓会ができたものである。

(はが・ひろし)

第48回東北地区大学図書館協議会総会

標記総会は、平成5年9月21日～22日の両日、郡山女子大学図書館を当番館として磐梯熱海温泉ホテル華の湯を会場に、加盟館55館から42館80名の参加を得て開催された。当番館郡山女子大学図書館黒田副館長の司会により開会され、郡山女子大学図書館秋月館長の開会の挨拶、関口学長の歓迎の挨拶、常任幹事館東北大学附属図書館菊地館長の挨拶があり、議事に入った。

本総会では、会津大学情報センター、岩手女子看護短期大学図書館、東北科学技術短期大学附属図書館及び青森公立大学図書館情報センターの4館からの加盟申請が承認され、加盟館数は59館となった。

永年勤続表彰は、元岩手大学附属図書館菊地武志氏、元山形大学附属図書館加藤ワカ子氏、元岩手医科大学附属図書館中村次男氏、元東北大学附属図書館菅澤榮治氏、同渡部昌子氏、同医学分館小野和夫氏及び同北青葉山分館山田みつえ氏の七氏に対し、長年にわたる図書館活動ならびに本協議会への貢献を賛え、各所属図書館長を介して退職時に表彰状と記念品の伝達が行われた旨の報告があった。

総会における主な協議事項、並びに、国立、公立、私立各部会での協議内容は、以下のとおりである。

(1) 50周年記念事業について

記念事業は、平成9年度宮城県地区が当番の際実施することとした。

(2) 大学図書館と放送大学ビデオ学習センターのかかわりについて

岩手大学から提案理由の説明があり、これからの生涯学習時代における大学図書館の役割について、新たな認識を持つ機会となった。

(3) 情報検索（NACSIS-IR等）における図書館員の役割について

東北大学から提案理由の説明があり、意見の交換が行われたが、①NACSIS-IR、JOIS、

DIALOG等のオンライン検索に加え、近年CD-ROM等も導入されるようになり、図書館サービスが拡大、多様化していること、②図書館が扱うデータベースの種類も今後ますます増えていく傾向にあること ③これらの状況に対応するためには、情報検索担当の専門的職員の養成、あるいは、研修が不可欠になってきていること、などが話し合われた。

(4) 外国雑誌の購入について

今年度会計検査院の实地検査に伴う、外国雑誌購入方法の見直しについて、特に国立大学においては緊急な課題であり、活発な意見の交換が行われた。

(5) 大学図書館の自己点検・評価に関する進捗状況と問題点について

岩手大学から提案理由の説明があり、各大学からそれぞれ取り組み方と進行状況が報告されたが、大学の自主的判断に委ねられていることがらでもあり、各大学とも独自の方法を模索している段階であることが確認された。

(6) ILLシステム稼働後の諸問題について

東北大学から、平成4年4月から稼働したILLシステムの運用状況、特に、処理件数の著しい増加と問題点が報告された。関連して一部の大学から、学術情報センターの目録システムへの参加について、小規模図書館ではそのメリットについて疑問をもっている旨の発言があった。

以上の他、大学図書館の環境づくり、留学生への対応、逐次刊行物の増加に伴う保管についてなど、各大学図書館が直面している課題について、市広く情報交換が行われた。

本総会における記念講演は、郡山女子大学教授・図書館長秋月観暎氏により、「中国の宗教思想と日本文化」と題して行われ、参加者一同大きな感銘を受けた。

次回総会は、東北薬科大学が当番館として開催することとなった。

附 属 図 書 館 の 概 況

この概況は毎年実施される大学図書館実態調査のうち主な項目をとりまとめたものである。表1は平成2年～平成4年度の概況、表2は平成5年度部局別のそれである。

表 1

区 分		平成2年度	平成3年度	平成4年度
蔵 書	和	1,515,207 冊	1,545,512 冊	1,578,784 冊
	洋	1,470,257	1,504,539	1,538,284
	計	2,985,464 冊	3,050,051 冊	3,117,068 冊
所 蔵 雑 誌 数	和	23,596 種	23,756 種	24,427 種
	洋	30,097	30,298	30,511
	計	53,693 種	54,054 種	54,938 種
年 間 受 入 数	和	38,790 冊	30,732 冊	33,272 冊
	洋	38,001	34,407	33,745
	計	76,791 冊	65,139 冊	67,017 冊
年 間 雑 誌 受 入 数	和	10,237 種	10,009 種	10,227 種
	洋	11,323	11,173	10,467
	計	21,560 種	21,182 種	20,694 種
奉仕対象 者 数	学 生	15,616 人	16,035 人	16,551 人
	教 官	2,334	2,361	2,414
一人当り 奉仕対象	蔵 書 数 (冊)	166	165.8	164.4
	年間受入冊数(冊)	4	3.5	3.5
	図書館資料費(千円)	46	47.8	45.7
図 書 館 職 員 数	総 数	145	144	140
	専 任	79	79	75
	臨 時	66	65	65
図書館職員1人当り奉仕対象者数		124	127.7	125.5
図 書 館 資 料 費 (千円)		830,427	878,593	867,556
大 学 総 経 費 (千円)		67,674,000	69,840,721	75,510,543

表 2

部 局		職員数 (定員外職員 の人数)	蔵 書 (平成5年3月31日現在)						平 成 4 年 度 受 入 冊 数						平 成 4 年 度 経 費				施設(平成5年5月1日現在)					
			図 書 (冊 数)			雑 誌 (種類数)			図 書 (冊 数)			雑 誌 (種類数)			図 書 館 資 料 費				運営費 除く (千円)	座席数 (席)	延面積 (㎡)	閲覧室 スペース (㎡)	書 庫 スペース (㎡)	収容可能 冊 数
			和	洋	計	和	洋	計	和	洋	計	和	洋	計	図 書 (千円)	雑 誌 (千円)	その他 (千円)	計 (千円)						
本 館	本 館	60 (25)	608,810	316,670	925,480	11,687	11,972	23,659	10,778 (7,083)	4,153 (3,080)	14,931 (10,163)	2,576 (554)	782 (681)	3,358 (1,235)	72,592	48,093	10,340	131,025	239,443	1,101	18,215	4,180	6,847	1,457,361
	文 学	2 (2)	203,563	117,788	321,351	1,064	806	1,870	8,075 (5,347)	4,655 (3,410)	12,730 (7,757)	643 (333)	586 (577)	1,229 (910)	63,204	11,832		75,036	2,100	1	68	2	10	4,972
	教 育	2 (1)	47,312	31,772	79,084	924	359	1,283	895 (727)	868 (575)	1,763 (1,302)	604 (134)	275 (268)	879 (402)	13,302	6,769		20,071	7,161	20	268	89	90	11,950
	法 学	3 (0)	88,189	116,171	204,360	928	577	1,505	2,089 (1,485)	2,257 (1,738)	4,346 (3,223)	800 (229)	574 (509)	1,374 (738)	29,306	10,802	18,488	58,596	2,718	35	835	65	580	80,777
	経 済	5 (1)	154,949	149,240	304,189	1,411	949	2,360	2,701 (1,773)	3,183 (2,131)	5,884 (3,904)	868 (133)	491 (415)	1,359 (548)	37,901	18,153	5,385	61,439	6,261	18	282	45	125	27,472
	素 材 研	2 (2)	7,396	15,060	22,456	253	273	526	156 (34)	450 (140)	606 (174)	93 (52)	118 (88)	211 (140)	4,003	8,998		13,001	4,709	16	246	37	144	25,972
	科 研	2 (1)	4,217	14,876	19,093	283	136	419	57 (34)	414 (60)	471 (94)	24 (9)	63 (63)	87 (72)	1,267	10,746		12,013	3,541	20	574	58	375	36,556
	流 体 研	2 (2)	12,074	17,505	29,579	87	271	358	193 (148)	382 (129)	575 (277)	50 (38)	118 (106)	168 (144)	3,299	8,961	19	12,279	5,350	8	212	27	163	30,111
	通 研	2 (0)	7,170	18,513	25,683	135	275	410	269 (41)	789 (133)	1,058 (174)	108 (91)	181 (176)	289 (267)	2,704	16,950	274	19,928	2,953	10	275	20	235	39,667
	反 応 研	2 (1)	6,182	21,046	27,228	111	231	342	157 (99)	654 (96)	811 (195)	66 (31)	124 (115)	190 (146)	5,781	20,223		26,004	3,511	28	331	63	252	39,380
	応 情 研	()	584	1,440	2,024	4	35	39	49 (8)	17 (5)	66 (13)	4 (4)	33 (33)	37 (37)										
	マイクロロン	2 (2)	834	3,234	4,068	7	32	39	0 (0)	173 (3)	173 (3)	7 (7)	27 (27)	34 (34)	44	5,114		5,158	6,148	4	98	12	35	5,778
	大 計	1 (1)	2,088	1,846	3,934	47	46	93	3 (3)	67 (7)	70 (10)	52 (52)	37 (36)	89 (88)	102	2,219	40	2,361	4,599	8	119	25	79	6,028
	道 生 研	1 (0)	17,526	11,081	28,607	333	278	611	16 (15)	162 (41)	178 (56)	127 (34)	84 (72)	211 (106)	820	4,985		5,805	309	4	206	18	160	32,638
	計	86 (38)	1,160,894	836,242	1,997,136	17,274	16,240	33,514	25,438 (16,797)	18,224 (11,548)	43,662 (28,345)	6,022 (1,701)	3,493 (3,166)	9,515 (4,867)	234,325	173,845	34,546	442,716	288,803	1,273	21,729	4,641	9,095	1,798,662
医 学 分 館	21 (11)	142,253	216,593	358,846	1,762	5,018	6,780	2,740 (1,966)	5,047 (4,565)	7,787 (6,531)	1,124 (482)	2,327 (2,052)	3,451 (2,534)	16,634	103,709	406	120,749	57,804	327	4,025	256	2,190	418,222	
北 青 葉 山 分 館	11 (5)	62,939	239,230	302,169	2,059	6,033	8,092	1,236 (675)	4,321 (902)	5,557 (1,577)	1,260 (257)	2,812 (778)	4,072 (1,035)	23,152	90,218		113,370	38,831	248	3,356	1,140	1,310	296,194	
工 学 分 館	10 (6)	133,690	148,626	282,316	1,706	1,714	3,420	1,965 (1,208)	3,502 (1,163)	5,467 (2,371)	804 (224)	885 (720)	1,689 (944)	40,967	78,949	572	120,488	36,676	210	2,712	1,194		96,527	
農 学 分 館	6 (2)	62,021	45,547	107,568	1,299	911	2,210	1,692 (639)	1,396 (206)	3,088 (845)	727 (132)	676 (296)	1,403 (428)	10,206	20,429	247	30,882	13,172	104	1,279	326	418	90,861	
計	48 (24)	400,903	649,996	1,050,899	6,826	13,676	20,502	7,633 (4,488)	14,266 (6,836)	21,899 (11,324)	3,915 (1,095)	6,700 (3,846)	10,615 (4,941)	90,959	293,305	1,225	385,489	146,483	889	11,372	2,916	3,918	901,804	
金 研	6 (3)	16,987	52,046	69,033	327	595	922	201 (67)	1,255 (308)	1,456 (375)	290 (66)	274 (169)	564 (235)	9,045	29,547	759	39,351	8,042	20	541	25	441	64,667	
総 計	計	140 (65)	1,578,784	1,538,284	3,117,068	24,427	30,511	54,938	33,272 (21,352)	33,745 (18,692)	67,017 (40,044)	10,277 (2,862)	10,467 (7,181)	20,694 (10,043)	334,329	496,697	36,530	867,556	443,328	2,182	33,642	7,582	13,454	2,765,133

会 議

◎学 内

11. 9 平成5年度第2回分館長会議

○協議事項

- (1) 自己点検・自己評価について
- (2) その他

○報告事項

- (1) 第48回東北地区大学図書館協議会総会について
- (2) 国立大学図書館協議会理事会について
- (3) 平成5年度補正予算にともなう施設・設備等の要求について
- (4) その他

11.10 平成5年度第2回附属図書館商議会

○協議事項

- (1) 自己点検・自己評価について
- (2) その他

○報告事項

- (1) 平成5年度図書館運営費（共通経費）について
- (2) 平成5年度図書館資料費の配分について
- (3) 平成6年度外国雑誌の購入について
- (4) 第40回国立大学図書館協議会総会について
- (5) 第48回東北地区大学図書館協議会総会について
- (6) 国立大学図書館協議会理事会について

- (7) 平成5年度補正予算にともなう施設・設備等の要求について

- (8) 各分館からの報告

- (9) その他

12. 1 附属図書館自己点検・自己評価小委員会（第1回）

12.10 附属図書館書庫内資料の再配置等に関する検討委員会（第1回）

6. 1.26 附属図書館書庫内資料の再配置等に関する検討委員会（第2回）

◎学 外

10.21～22 第6回国立大学図書館協議会シンポジウム（東地区）（於：放送大学）

10.26 国立大学図書館協議会常務理事会（平成5年度第2回）（於：大阪ガーデンパレス）

10.26 文献複写に係る著作権問題特別委員会（於：大阪ガーデンパレス）

10.26 図書館情報システム特別委員会（於：大阪ガーデンパレス）

10.27 国立大学図書館協議会理事会（平成5年度第2回）（於：大阪ガーデンパレス）

11.25 第26回国立七大学附属図書館部課長会議（於：九州大学）

11.26 第67次国立七大学附属図書館協議会（於：九州大学）

お 知 ら せ

○土曜日の図書館サービスについて

平成4年5月から、国家公務員の完全週休2日制の実施にともない、附属図書館本館では、土曜日の図書館サービスを試行してまいりましたが、平成5年6月から、次のとおり本格的に実施しておりますのでご利用ください。

1. サービス時間

授業の実施期間 9:00～17:00

授業の休業期間 9:00～12:30

2. サービス内容

- (1) 学生閲覧室、自由閲覧室での閲覧・自習
- (2) 学生閲覧室に配架してある図書の貸出・返却
- (3) 蔵書検索

○研究室パソコンからの文献複写申込みについて

学術情報センターの情報検索サービス

(NACSIS-IR)を通じて、資料の複写及び現物貸借の申込みができるようになりました。研究室のパソコンからNACSIS-IRのデータベースを検索し、その画面から必要な資料の複写もしくは貸出の申込みをすることができます。

このサービスを利用するためには、

- (1) 「学術情報センターの情報検索サービス利用資格」(学術情報センターへ申請)
- (2) 「学術情報センター情報検索サービスからの文献複写等申込依頼書」(所属の図書館へ申請)

が必要となります。詳しくは、附属図書館本館レファレンス・デスク(内線、川内2422・2430)へお問い合わせください。

○高校生の附属図書館本館見学相次ぐ。

このところ、附属図書館本館には、高校生の見学者が相次いでいます。5月27日、福島県立福島東高3年生40名、6月4日、青森県立八戸高5名、6月7日、山形県立山形西高2年生45名、7月19日、青森県立青森高2年

生50名、8月2日、青森県立弘前高2年生63名などです。

主な目的は、進路指導の一環としての施設見学ですが、ある高校では単なる見学だけに終わらせず、感想文集を作成するなどして、将来の目標設定の一助となるよう指導に取り組んでいるところもあります。図書館としても、利用者に迷惑がかからないように配慮しながら、できるだけこのような見学の要望には応えていくことにしております。

感想文集の中から一節を引用します。

「あの図書館を見たなら、図書館のために東北大学に入りたいと思う人があってもおかしくないと思う。そして又、カッコ良いからあの図書館で勉強する人がいても無理はないような気がした。なにしろ、あまりにも凄いシステムで、中に居るだけでカッコ良い気がしてくるのだ。これだけ大規模な図書館が、他にあるのか無いのか、私は知らないが、どちらにしても私の想像の域を超えた世界だった。」

編 集 後 記

本学の図書館業務の電算化がスタートしてからいつのまにか9年目を迎えようとしています。その間、目録業務、窓口業務、受入業務、……と図書館の業務全般にわたり電算化を推進され、ご苦労してこられた職員の方々に頭の下がる思いです。

本号は、電算化のなかでも重要な位置を占めている業務の一つである目録のデータベースにスポットを当てました。図書館はかつて

の図書館のイメージからは想像もつかないようになっただことは周知のとおりです。このようなことを念頭におきながら読んでいただければ幸いです。

電動集密書架の導入にともなう資料再配置の検討や自己点検・自己評価の執筆など多忙を極めるなか寄稿いただいた方々に心からお礼を申し上げます。(T)

東北大学附属図書館報「木這子」 第18巻 第3号(通巻65号) 発行日 平成6年1月31日

発行人 岩元忠幸 広報委員長 伊藤則男

発行所 東北大学附属図書館 仙台市青葉区川内 電話 代表 222-1800(2440)